The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	小児がん病棟における病院ボランティアの射程 : 学生ボランティアグループの活動を事例に
Author(s)	李, 永淑
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57721
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【34】

氏　　名	李（り）　永（よん）　淑（すく）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２３５２４　号
学 位 授 与 年 月 日	平成22年３月23日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**小児がん病棟における病院ボランティアの射程－学生ボランティアグループの活動を事例に－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　中村　安秀 （副査） 教　授　澤村　信英　　准教授　渥美　公秀

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、地方国立大学医学部附属病院の小児がん病棟で 10 年にわたって活動を続ける学生ボランティアグループを事例に、病院ボランティアの射程について論じる。本研究では、学生の立場でありながら専門家支配が前提である病院社会において受容され、独自の価値観を創造しつづけた問題意識に基づき考察した。また、小児がん病棟という場所や患児だけではなく、活動に関わった異なる立場の様々な人々に何等かの影響を与えたり変容をもたらしたりした点に着目し、検討を行った。

本研究における調査対象は、学生ボランティアグループの活動を通して関わりを持った、多種多様な立場の行為者たちとした。具体的には、学生ボランティアグループのメンバーである学生ボランティアたち、入院患児らとその家族、医師、看護師をはじめとする病院職員たち、行政職員である。そして彼らを水平的な位置に置き、彼らの視点から複眼的にこの活動の本質をとらえていく。

本研究では、調査データの分析に当たり、H・ブルーマ―の提唱したシンボリック相互作用論（以下、SI論）から視座を得て、自己、他者（他の調査対象者たち）、共有社会（本事例の学生ボランティアグループの活動や当該病院など）という分析の枠組みを設けた。そして、調査対象者である行為者を主体として、行為者の視点から調査データをこれらの分析の枠組みに沿って分類した。そして、彼らが学生ボランティアグループの活動という経験的世界を通して、どのような解釈を行い、どのような意味を形成したのかに関して、詳細な分析を行った。また、本事例では、筆者自身が行為者の一人として深くかつ継続的に関与していた。そこで、行為者としての筆者と研究者としての筆者の相対

化を目指して、研究者が行為者の視点を獲得するアプローチというSI論の視座に着目した。この視座を取り入れることによって、筆者自身が異なる調査対象者らの役割や視座を部分的に取得していたことが整理され、本研究を客観的な検討だけではなく、より行為者らの本質に迫った検討も可能となった。また、本研究では追跡調査も実施しており、本事例の10年にわたる全継起を分析の対象とした。

第１章では小児がんを取り巻く現状について、小児がん治療の急速な進歩に伴う環境の変化を概観した。その変化に伴い近年盛んに謳われるようになった、小児がん患児に対するトータル・ケアの流れについて整理した。

第２章では日本における病院ボランティアを概観した。日本におけるボランティアの現状を概観した後、病院ボランティアに焦点を絞って歴史的経緯や現状を整理し、病院ボランティアの円滑な活動に欠かせない病院ボランティア・コーディネーターについて、文献や事例報告に基づき日本における特徴や新しい動向に関して考察した。そして、日本における病院ボランティア研究の分析を行い、これらと本事例を照合しながら本研究における問いを具現化させた。

第３章では本研究における視座と方法について述べる。まず、病院という研究フィールドの特性を整理し、本研究ではフリードソンの提唱した、医療に対する研究を目指す姿勢と方向性を確認した。そして、SI 論を用いた事例整理の方法と分析の枠組みを整理し、調査対象者の分類と位置付けを明らかにした。そして、SI 論を批判的見地から検討し、本研究における限界を整理した。

第４章では本事例に様々な形で関与した学生ボランティア、患児とその家族、医師、看護師、チャイルドライフスペシャリスト（以下、CLS）、医事課職員といった病院職員及び行政職員を行為者として質的調査および質問紙調査を実施し、調査データを第３章で示した分析の枠組みに則り整理した。

分析の結果、第一に、少数の例外を除き、多くの行為者たちは本事例を高く評価していた。学生ボランティア、患児と家族は活動を「楽しかった」と振り返った。学生ボランティアは職業選択や進路、仕事や日常生活に影響を与えていた。 医師や看護師、教師等の専門職に就いている者も多かったが、活動の経験を照らし合わせ、子どもや患者、病院や医療、教育現場を、付与された役職やイメージではなく、実態から解釈していた。患児と家族は、入院生活を「宝物」と表現したり、入院中の経験を退院後に活かしたり、学生ボランティアグループの一員を目指して現在はメンバーとして活躍する児もいた。 病院職員らも病棟に欠かせない一員としての意識が定着し、学生ボランティアグループが病棟の一部として協働やコミュニケーションの対象へと変化していた。

第二に、学生ボランティアグループは独自の存在として認められていた。 たとえば、同じように遊びを用いる CLS とは衝突もなく、互いに異なった役割と領域、存在価値を理解していた。また患児やその家族らも、「CLS は対象を個人とし、患児を患者としてストレスケアをする病院職員」であり、「学生ボランティアは対象を集団とし、子どもとして患児らと共に楽しみを共有し、追求し、創造する友達」という違いを明確に認識していた。そして、学生ボランティアらとともに活動し、患児らと家族の病棟での日常を共にし、学生ボランティアの活動と病棟の関係を図っていた筆者は「クラスの担任」、CLS は「保健室の先生」ととらえる意見もあった。他方、医師や看護師らは筆者と CLS は遊びを扱う、学生ボランティアのコーディネートを行う点で同じようなものだと考えていたが、明確な違いは資格の有無であるという回答しか得ることができなかった。また、医療者は学生ボランティアの活動は患児らを支援しているととらえていたが、学生ボランティアらは患児らと共に楽しんでいるととらえていた。医療者は、ボランティア・コーディネーターは連絡調整役であり、病院職員と兼任することを提案していたが、学生ボランティアや患児や家族は、小児がん病棟における異なる立場の人々の全体を捉えながら彼らのパワーバランスを整え、ボランティア活動のマネージメントができる役割が果たせる専任の存在を求めていた。

第三に、10 年に及ぶ活動の存続を支えた要因は、学生ボランティアらの「継続」という想いと、活動を受け入れてくれた患児らと母親たちの存在だった。病院職員らは活動の素地がある程度構築され、活動の意義を実感できてから懐疑的な姿勢から協力的な姿勢へと変化していた。行政と病院、小児病棟現場の間での情報共有には大きな障壁があり、相互間の接点はほとんどなかった。

第５章では第４章の結果を踏まえて、本事例が示した病院ボランティアの射程を考察した。

本研究から、本事例は構成員が大学生であり、ボランティアだったことで、専門家の限界と彼らの支配による病院の限界を超える活動が展開できたことが明らかになった。そして、そのような活動は学生ボランティアだけではなく、患児、家族、病院職員らにも実際的なインパクトを与える教育機能を発揮していた。また、活動の日常的な過程と蓄積が、様々な立場の人々の価値観を共通の価値観へと包摂する過程であり、活動が継承された根幹となっていた。さらに、学生たちは患児らを支援する存在としてのボランティアではなく、彼らと共に病院という医療モデルの中で、楽しさを共に追求していく存在であった。そして活動は、「小児がん患児」、「医師」、などの属性のとらわれになっている人々が、その属性を外して遊びの活動に様々な形で行為者として関与し、行為を解釈し、その解釈を互いに照らし合わせながら小児がん病棟という固着した現場を変えていける場であったことを整理することができた。それは、スティグマを負った人とその人にケアを提供する人々との閉じられた関係性を開く過程であったと考えられる。つまり、援助される者と援助者という援助の非対称性を越えるために、病院ボランティアという第三者が遊びの活動という病院の常識に囚われない視点を入れた別の枠組みを作り、楽しさを追求するという共通の目的を持ちながら共にやっていくことによって、閉じられた、固着した関係性を開く作業をしたと整理することができる。また、病人化させられる病院社会において、患児らが自己決定力を取り戻す場であった。

本研究は、小児がん病棟における様々な立場の行為者らの複眼的見地から病院ボランティアの射程を論じた、日本では恐らく初めての実践的研究である。そして、病院ボランティアの存在が、行為者らの規範的属性をはずして病院内で新たな関係性を作る応用可能性を示すことができたことにより、今後、様々なボランティア活動現場においても活用できる実践的意義も示された。

論文審査の結果の要旨

本論文は、国立大学医学部附属病院の小児がん病棟で10年にわたって活動を続ける学生ボランティアグループを事例に、専門家支配が前提である病院社会において、学生という立場として病棟内で受容され新しい価値観を創造し続けた病院ボランティアの射程について論じたものである。本論文では、学生ボランティアグループの活動という経験的世界を通して関わった人々を行為者と見なし、彼らがどのような解釈を行い、意味を形成したのかについて、医師、看護師などの医療者への質問紙調査およびボランティア学生、患者およびその家族に対するインタビュー調査など数年にわたる継続的調査を行い、シンボリック相互作用論の視座を応用して分析した。

調査結果では、学生ボランティアは小児がん患児らを単に支援するだけの存在ではなく、彼らと共に病院という医療モデルの中で、楽しさを共に追求していた存在であった。専門家の限界と彼ら支配による病院の限界を超える活動であり、属性の囚われになっている行為者らがその属性を外して小児がん病棟という固着した現場を変えていける場であった。また行為者らに実際的な変化を与える教育機能を有し、彼らを共通の価値観へと包摂する過程でもあった。そして病人化させられる患児らが自己決定力を取り戻す場であった。

本論文は、小児がん病棟における様々な立場の行為者らの複眼的見地から病院ボランティアの意義を検討した、日本では恐らく初めての実践的研究である。病院ボランティアの存在が病院内で新たな関係性を作る応用可能性を示すことができたことにより、今後、様々なボランティア活動現場においても活用できる実践的意義も示された。本研究の独自性はボランティア学のみならず医学的にも高く評価され、博士号授与にふさわしいと判断された。